

みやもとだより

第17号 平成28年12月発行

季節のおまつり

椎葉神楽



天井からぶら下がる“雲”

熊本市から車で約二時間、椎葉村に入る。さらに真っ暗な山道を小一時間進むと、梅尾神社の夜神楽の灯がぱっと見えてくる。九州山地の山間に抱かれた宮崎県の椎葉村は、壇の浦の戦いで滅んだ平家の落人伝説も色濃く残り、日本三大秘境にも数えられている。また柳田國男が椎葉の狩猟風俗を紹介したこと、日本民俗学発祥の地とも言われている。椎葉神楽は四地区二十六か所の集落で伝承され、十一月下旬から十二月にかけて行われる。夕刻になると煮しめや蕎麦、餅などの振

舞いがあり、酒を酌み交わしながら見物が始まる。神楽は民家を神楽宿とするのが本来であるが、神社や公民館で行う集落もある。舞処である御神屋を設け、周囲には注連や切紙飾りを張りまわし、天井からは雲という天蓋のようなものを吊るす。これは神聖な空間を表している。

演目は幣、鈴、扇子、榊枝、刀、弓などを持つ素面の「採物舞」を主とし、鬼神などの面をつけて舞う「面の舞」と大別される。はじめに「板起し」「御神屋」など舞のない唱教があり、『梁塵秘抄』所収の類歌もみられ、民俗芸能史的にも貴重である。椎葉は九州山岳地帯有数の狩猟、焼き畑文化を伝承してきた地で、猪肉や稗、粟、小豆などの雑穀の供え物をした後、神迎えがある。神楽はそれらを背景とした三十三番の演目を通して深く継承されている。平野部から隔絶された地にあつたためか、神楽は素朴で近世以前の古態を留めており、一年の最後を締めくくるこの祭りは、冬祭り、年祭りとも呼ばれている。村の女たちも眠気覚ましのため、演者に向かって「神楽せり歌」の合の手を入れ、夜を徹して楽しんでいる。

(写真・文 宮本卯之助)



宮崎県、梅尾神社の夜神楽

この国の佳き伝統とともに
宮本卯之助

祭りのはなし

人々の思いで成し遂げた宮神輿の新調

今年も九月十七・十八日に行われ、地元を始め多くの人々を惹きつけた赤坂氷川祭。今年の目玉の一つとなつたのが、神社にゆかりのある徳川吉宗公の江戸幕府八代将軍就任三〇〇年に合わせて新調した宮神輿。私どもでその製作に携わらせていただきました。

この復元新調は、そもそもは先代の禰宜、惠川義浩さんが目指したものでした。元々赤坂氷川祭は、江戸時代には、宮神輿を高さ約七メートルになる十三本の山車に取り囲まれながら巡行する、江戸でも有数の祭礼でした。赤坂にその頃の賑わいを取り戻したいとお考えになつた惠川さんが、山車の修復を思い立ち、N P O 法人赤坂氷川山車保存会を設立するなど奔走されたのです。

ご縁をいただき、私どもでも江戸型山車（將軍上覧の為に、城門をくぐつて江戸城内へ入城できるよう高さ調整を行うからくりを備えた山車）の復元にあたさせていただいていたのですが、その作業の途中で、惠川さんに一枚の写真を見せられました。そこに写つていたのが宮神輿。戦前に活躍していたものが、戦災で一九四五年に焼失したままになつてること。

「いずれ復元し、宮神輿を山車が警護する江戸時代の赤坂の祭礼を再現した

い」と熱く語られる恵川さんの様子に心を打たれ、実現できる日が願つております。

ところが、

二〇一二年末、恵川さんは四十歳の若さで急逝。推進役を失つて、立ち消えてしまうかに思われた宮神輿復元でしたが、恵川さんの思いは、ご遺族や筆頭総代を始めとする氏子の皆様に受け継がれました。弟の義孝さんがそれまでの勤めを辞されて禰宜となり、復元を推し進めてくださったのです。

当初の義浩さんの構想では台輪寸法が四尺五寸（約1.35メートル）の神輿でしたが、現実的に担げるサイズをとの思いから、四尺（約1.2メートル）に変更。今年の祭では、復元された三本の江戸型山車を先導に完成した神輿が氏子各町を巡るさまに、私たちも胸を熱くしました。

次号にて、この神輿の細部に込めた思いをお話しさせていただきます。



完成した宮神輿

時節となつきました。町内会などで夜回りが行われるという地域も多いのではないでしようか。「火の用心をいたしましょ」の掛け声と、カソ・カンと鳴る拍子木の音は深まる冬を思わせる風物詩ともいえます。さてこの拍子木には、さまざまな種類があります。夜回りで使う聞き慣れたものは、祭の際には進行の合図ともなるもの。鳶頭の腰からぶら下がつている様子を目にして方もないで急逝。推進役を失つて、立ち消えてしまうかに思われた宮神輿復元でした。元々赤坂氷川祭は、江戸時代には、宮神輿を高さ約七メートルになる十三本の山車に取り囲まれながら巡行する、江戸でも有数の祭礼でした。赤坂にその頃の賑わいを取り戻したいとお考えになつた惠川さんが、山車の修復を思い立ち、N P O 法人赤坂氷川山車保存会を設立するなど奔走されたのです。

歌舞伎では、「拍子木」より「桺」と呼ばれることが多く、この音 자체も桺と表現されるようです。幕の開閉や場面転換などを伝える重要な音ですが、舞台では、マイクを通して舞台上で、観客が、観光資源として以上に、生活文化としての評価が高まつていくことを願います。祭りを支える全ての方々、そのお一人ずつの力で、また一年、新たな歴史が刻まれていく。その傍らにあり続けられるよう、私たちも襟を正して新年、新たな年を迎えると思いまます。皆さんにも幸多き一年となりますように。

多くの舞台関係者へお納めしておりましたが、それぞれの方の舞台人生で、一度度換えることがあるかないかというほどに付き合いの長いもの。油を染み込ませるなどそれぞれのメンテナンスをなさるようです。

拍子木と桺

古典芸能へのとびら

年の瀬が近づき、何かと慌ただしい

東京オリンピックに向けて日本文化に注目が集まる中、ユネスコの無形文化遺産に「山・鉾・屋台行事」が登録されました。秩父の夜祭が始まればしく、連綿と祭を受け継いできた地元の担い手の皆さんに最大限の賛辞をお送りしたいと思います。日本各地には、絢爛な山車祭から、椎葉村の夜神楽のよくなひつそりとした山村で伝えられてきたものまで、実に多彩に存在します。今回の世界遺産認定を機に、それらの人々の生活に根ざす祭礼が、観光資源として以上に、生活文化としての評価が高まついくことを願います。

代表取締役社長
宮本芳彦

行
發
株式会社宮本卯之助商店
企画広報室
〒111-10035
東京都台東区西浅草二丁目
電話 03-3384-4122
www.miyanoto-unosuke.co.jp